

## エッセイ

### 私をカザンザキスに向かわせたもの——『蛇と百合』翻訳苦労話

其原 哲也 SONOHARA, Tetsuya

翻訳家

はじめに

私は、カザンザキスの翻訳に取り組んでいる其原哲也と申します。このたび京緑社さまより『蛇と百合』の日本語訳を出版させていただきました。その出版記念講演を2018年11月に行いました。講演内容に基づいてエッセイをつづります。なお、『蛇と百合』の日本語訳は、エッセイ末の参考部分にURLを記載します。

#### I. 私をカザンザキスに向かわせたもの

##### ① カザンザキスと遭遇するまでの読書遍歴

皆さんは、カザンザキスとどんな出会いをお持ちですか。今日は私の個人的な話をさせていただきます。

私は小さい頃から好奇心旺盛で本好きな子供でした。両親も本好きで、私の家には本があふれかえり、わが幼心に、いつかこの本棚の本を全部読んでやろうと思ったものでした。

小学生の時小遣いで買った本は、『ドラえもん』や『ハイスクール！奇面組』などの漫画本などの他に、森鷗外『山椒大夫』、川端康成『雪国』、高村光太郎詩集などでした。

中学二年の時、些細なきっかけで運動部を辞めてから、悩みと迷いが一気に心身に押し寄せてきてしまい、その頃から家にある蔵書や学校の図書室の文学書、主に外国の古典文学を読みふけるようになりました。このころ読んで特に引き付けられた文学書は、ロマン・ロラン『ジャン・クリストフ』、ドストエフスキー『罪と罰』、三国志演義などでした。

##### ② ギリシアへの関心の芽生え

中学三年の一学期、六月の梅雨入りのころ、京都・奈良への修学旅行がありました。奈良公園では、丁度「シルクロード博」という博覧会が開催されていて、その中のあるパビリオンで私はギリシア文化と運命的な出会いを果たしました。彫刻『サモトラケのニケ』の等身大レプリカを見たのです。そしてその若々しくも気高い女神像にすっかり魅了されてしまいました。これが、私がギリシア文化に興味を抱くきっかけになったのだと思っています。

同じころ、旧ソ連の作家イリーンの『人間の歴史』を読むようになりました。学校生活全般に懐疑的な気分にあふれていた当時の私には、この本で述べられている歴史観はなかなか刺激的で興味深く思われました。この本の中で世界を変える起点となった古代ギリシアの英雄的な哲学者たちについて述べられていました。タレス、ヘラクレイトス、ピタゴラス、クセノファネス、エン

ペドクレス、デモクリトス、ソクラテス、プラトン（尤もソクラテスとプラトンについてはかなり批判的な記述でしたが）、アリストテレス、ディオゲネスなど。

ギリシア神話の本も読むようになりました。天文学にも興味があったので星座の話にはなじんでいたのですが、ここらあたりからギリシア神話の文学性にも興味を持つようになりました。

### ③ カザンザキスとの出会い

文学的、哲学的なものへの知的開眼で私の頭の中は沸騰状態でしたが、体調はすぐれず学校生活では面白くないこと続きで気分はどんどん落ち込んでいきました。そんな中学生生活も終わりに近づいた三学期、私は家の書棚の奥から一冊の本をふと手に取っていました。そうです。今日ここにお集まりの皆さんが多分一度はお読みになったことがあるであろうこのフォーラムの主役、ニコス・カザンザキスの小説『その男ゾルバ』です。

読んでみよと思ったきっかけは、映画になった作品だったからというのが一つの理由なのを否定しません。読み始めは地味で低調な印象でした。しかし、心の模索が始まって以来読んで心の底から感銘を受けた小説、例えばロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』などは、出だしが漫画やアニメやテレビゲームのような派手な「つかみ」がないものが多いということが分かってきたその頃の私には、少し我慢して注意深く読んでいけば、だんだん面白い世界が開けてくることのあるという勘のようなものが出来つつありました。それはこの本に関しても間違っていないでした。この本を読み終わった後、しばらく私は虚構と現実、絶望と希望の間を彷徨い、心地よい無力感に浸っていました。

### ④ カザンザキスへの関心の高まり

学業以外で得ることのできなかつた中学時代でしたが、何冊かの本との豊饒な出会いから、芸術の美しさ、自然の美しさに心を留め、慰める楽しみを覚えました。高校に入り、学業だけでなく、スポーツへの興味も全く無くなったわけではありませんでしたが、運動部には入らず、放課後は図書室で面白そうな本の探索に勤しむようになりました。

高校時代の自分は総じていえば不完全燃焼でした。しかし、心の中では、自分が世界になじめないのは決して自分自身のせいだけではない、世界の方が間違っている部分があり、その思いをいつか必ず表現してやるという気持ちが生まれました。

カザンザキス文学との初遭遇は魅惑的で刺激的でしたが、必ずしも気持ちのいいだけの経験ではありませんでした。そこにはなにがしかの絶望に近い気分が含まれていたのです。しかし、頭の中で始まっていた文学的思想的探求において気になる存在であり続けました。そして、高校・浪人・大学と進学する生活の中で、地元の市立図書館で少しずつ『その男ゾルバ』以外の作品も読んでいきました。何よりも、その文体の異様な緊迫感がほかの文学者にはないものだと感じていました。

私が高校生、大学生だったころは、世界では東西冷戦が終結、ベルリンの壁が打ち壊され、中

国では第二次天安門事件が起こり、ソ連、東欧の社会主義圏が崩壊する大激動期でした。しかし、私は「歴史の終わり」とか「自由世界の勝利」などの当時流行したフレーズには端から懐疑的でした。大学で哲学を学ぼうとしたのも、全てのことに自分なりの意見を持てる人間になりたいと思ったからですが、そのような世界の状況にひとことモノ申したいと思っていたからかもしれません。

しかしいざ大学に入ってみるとどうも勉強意欲がいまいち湧いてきませんでした。それでも文学書の耽読だけは継続し、カザンザキスの『キリスト最後のこころみ』、『アッシジの貧者』、『兄弟殺し』などの超重量級の問題作も読破したのです。

### ⑤ 大学時代の模索

くすぶった、さえない気持ちのまま大学二回生も終わりかけた 1995 年 1 月 17 日、阪神・淡路大震災が発生しました。居ても立っても居られない心持になった私は、いくつものボランティア団体に連絡をつけてみて、現地に赴く手立てを探り始めました。

ピースボートという団体が、私の求めている条件に近そうだったので、そこに登録して、三月の下旬、神戸市長田区に向かいました。そこで十日ほど、プレハブ建設のお手伝いをさせて頂きました。神奈川県のお宅に戻ったのは四月に入ってからでした。

ピースボートという団体は、世界一周の船旅を企画運営する NGO です。大学での勉強にいまいち興が乗っていなかった私は、しばらく考えた末、思い切ってその年の世界一周クルーズに参加してみることに決めました。

その年のピースボート世界一周クルーズでは、本来ギリシアのピレウスに寄港する予定はありませんでした。クロアチアのドブロブニクに泊まる予定だったのがユーゴスラヴィア内戦の影響で寄れなくなり、急遽ピレウスへと寄港地を変えたのです。ピレウスには、船は三日間停泊することになりました。クレタ島のイラクリオまでのフェリーは片道 12 時間、宿泊しなければ、行って一日クレタ島見物をしてピレウスに戻って来れないことはなさそうでした。

私は迷わずイラクリオ往復のフェリーの切符を取りました。人生初の一人旅でした。そして、往きのフェリーがピレウスのふ頭を出発したとき、時間がまるで自分の手元で己が意のままに伸縮できるかのような不思議な感じを見出したのです。船内放送で『ゾルバ・ダンス』が流れました。翌朝木の柵みたいな船室のベッドで目を覚ました時、もうフェリーはイラクリオについていました。

カザンザキスと『その男ゾルバ』の影を求めてここまでやって来た私でしたが、地図や旅行案内書のようなものさえほとんど持っていなかったのも、どうすればその世界に近づけるかもわかっていませんでした。

とりあえず農業銀行で円をドラクマに変え、郵便局で絵葉書を買って水を飲んでから、考古学博物館へ向かいました。クノッソスを訪れ市内にとって帰った時、時刻は午後 2 時を過ぎていました。市街を歩いたのですがカザンザキスとゾルバの影にはなかなか出会えません。そうこうす

すがカザンザキスとゾルバの影にはなかなか出会えません。そうこうするうちに陽はだんだんと傾いていく。ピレウスに帰るフェリーは7時に出航する予定と聞いていた。自分の心の中の時間はある程度自分の意のままになっても、やはり自分の外側の時間は容赦なく過ぎていく。

市街中心部に戻っていた私は、午後5時近くになり、ようやく意を決してタクシーの運転手に、「カザンザキスのお墓までやってくれ。そこで15分待ってくれ。そのあとで歴史博物館まで頼む。」と言い得たのです。



1995年7月、アンコールトムにて。左端著者



1995年8月、クレタ島イラクリオ市街1



イラクリオ市街2



エル・グレコ像



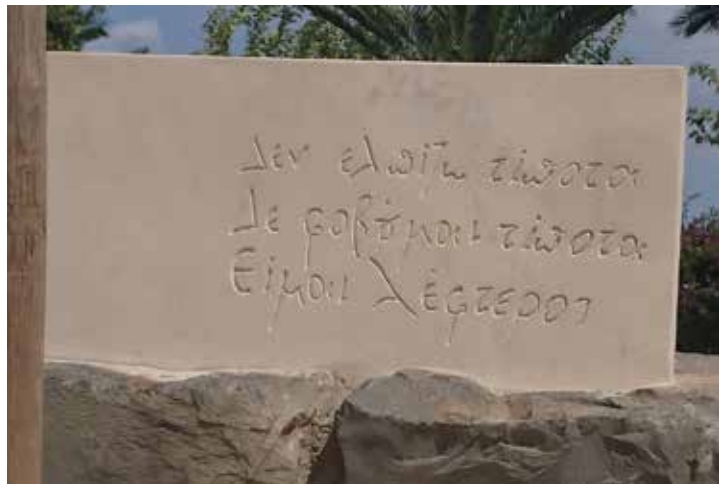
イラクリオ市掲示板



クレタ島の夕陽



カザンザキスのお墓 (2017年8月編集部撮影)



墓碑銘 (2017年8月編集部撮影)

### ⑥ カザンザキスのお墓

その日、空は雲一つない快晴で真っ青でした。午後になっても空気は澄んだままで、登った丘からは遠くの山々までよく見えました。参詣者らしき人が四五人、みな思い思いに墓石の周りを散策していました。

こんな不思議な偉人のお墓を私は他に見たことがありません。小高い丘の上にあるという点では日本の古墳に似ているかもしれませんが。棺も墓碑も十字架も特に奇妙な形をしているわけではありません。しかし、そばまで誰でも近づけてのぞき込むことが出来る棺、丸太を組み合わせただけの素朴な十字架は天空に向かって突き抜けているような雰囲気、「私は何も望まない。私は何も恐れない。私は自由である。」の墓銘碑は、同じ旅行中に見たエルサレムの金色に輝く十字架を持つ聖墳墓よりも、私にとっては印象的でした。

## II. 『蛇と百合』 翻訳苦労話

### ① 現代ギリシア語学習の開始

「フレンドリーで突き抜けた人」、それがこの時の旅で私がカザンザキスに持った印象でした。そして、この人の考えたこと、体験したこと、著述したことをぜひ理解し、できれば日本語に翻訳したいと強く願い始めました。

旅行から日本に帰国した後、四か月ぐらいの間は家でぐったりとしていたのですが、その後、何とかして現代ギリシア語を習得すべく行動開始しました。

まず地元の図書館へ行って現代ギリシア語の文法書を借りてきて、これをノートに筆写しました。次に都心の本屋に遠征して別の文法書とカセットテープ単語集、希英辞典、英希辞典を買って、前の本ともどもノートに何度も書き写しながら大声を出して読む、というような勉強を五年間ほど続けました。

この方法は自分のペースで学習できるという点ではよいのですが、自分がどのくらい上達しているのかわかりにくいという難点がありました。

会話の実力も上げるべく現代ギリシア語講座のある語学学校やカルチャーセンターを探していましたが、なかなか見つからない。そのうち、朝日カルチャーセンターの存在を耳にしました。調べてみると自分に合う講座がありそうだったので、期待に胸を高鳴らせて新宿住友ビルの扉をくぐりました。2002年10月のことでした。

朝日カルチャーで何年間か勉強しているうちにどうしても一度ギリシアへ行ってみたいくなりました。そこで、旅行会社のツアーを利用して、2010年の春一週間のギリシア旅行に出かけました。あらかじめファックスでアテネのエレフテルダキス書店に連絡しておいて、ツアー中の自由行動日に訪れ、バビニョティスのギリシア語辞典とカザンザキスの『続オデュッセイア』を手に入れました。エレフテルダキス書店を訪れた日から約一週間後、帰国していた私は、本屋から目と鼻の先の大学通りで暴動があったことを知りました。

2011年3月11日の東日本大震災の時、私は神奈川県の実家にいました。幸いなことに自分の家族には特に被害はなかったのですが、これを機に「自分の住んでいる場所もいつ大きな災害に見舞われるかわからない。やりたいことは早めに手を付けた方がいい。」という思いが強まって来ました。翻訳業の達成を急ぐ気持ちになったのです。

そんなわが願いと努力、周囲の人々の暖かい応援が徐々に実を結び始め、2013年7月、テサロニキへ一か月間の語学留学がかないました。その時私はカザンザキスの著作を何冊か購入したのですが、その中に今日の話の主題でもある小説『蛇と百合』があったのです。

### ② なぜ『蛇と百合』を選んだか

実はこの小説の原文は、その時以前にすでに読み始めていました。

朝日カルチャーの現代ギリシア語講座で二、三回講師をなさったあるギリシア人の方から、インターネットからプリントアウトして冊子にしたものを頂いたことがあったのです。

カザンザキスの作品の中でも、なぜまず『蛇と百合』を読もうと思ったかと言えば、それがカザンザキスの処女作であり、日本語に訳されていない作品だったからというのが最大の理由です。そして彼の小説作品の中では一番短いという理由もありました。

読解を始めたのが2009年の11月ごろだったと記憶しています。そして読み始めてすぐに、それが手持ちの小さな希日辞典で手に負える作品ではないことを思い知らされました。本格的な始動は2010年3月のギリシア旅行でバビニョティスの希日辞典を購入した後になりました。ほぼ週一回、勉強や家事の合間に、少しずつ、わからない単語を辞典で引きながら読み進めていきました。

先にもお話ししたように、2011年の東日本大震災の時、私の住んでいる場所と家族には地震の直接の被害はありませんでした。しかし当時のノートを読み返すと、直後の四か月ぐらい読解作業を中断していたことが分かります。やはり、あの当時の騒然とした世情の中で、落ち着いて外国語文学に取り組める気分ではなかったのかもしれない。

読解作業に本腰を入れて取り組み始めたのは、2013年9月、ギリシア短期留学から帰って以降でした。

ところで、『蛇と百合』の内容に触れますと、若い画家の死後に発見された日記という設定で、ひとつの恋の、出会いから無理心中に至るまでの顛末を、春たけなわのころに始まりギリシア独立記念日で終わる約一年間の記録としてまとめたものです。

魅惑的な女性描写、哲学的な人生観照、古代オリエント以来のギリシアの歴史が混然一体となった若きカザンザキスの情熱的な文体の作品です。

### ③ 実際に翻訳に取り組んでみて突き当たった問題と感想

読み進めていくうえでまず突き当たった問題は、語彙の豊富さ、難解さでした。バビニョティスの分厚い辞書は大いに役に立ったのですが、それでもわからない単語が続出してきました。それらは、手持ちの希英辞典、古典ギリシア語辞典、インターネットのギリシア語辞典サイト等を用いて調べました。

しかし後で訳文に取り掛かった段階で実感したのは、読解の段階で辞書を引いて解ったつもりになっていた訳語の、いかに浅くて中途半端だったかということでした。再び辞書を引き直したことも何度あったか知りません。一語の解釈に迷って数日間頭を悩ますなど、江戸時代の杉田玄白の『蘭東事始』もかくやと思うときもありました。

それでも解らないときは、留学の時に知り合い、カザンザキス翻訳で意気投合したラトヴィア人の友人とメールをやり取りして、乗り越えました。

どのような言葉にてこずったか、ひとつ具体例を挙げます。第一部6月4日の条の第三段落に、《ξεπεταρίσματα》という語が出てきます。『現代ギリシア語辞典』はおろか、希英辞典、古典ギリシア語辞典、バビニョティスにさえ載っていなかったため、ラトヴィア人の友人にメールで尋ねたところ、おそらく《γίνεται πιο δυνατές οι κινήσεις των φτερών. Flap wings, フラップの翼》のこ

とだろうという返事を得ました。しかしいざ訳文を作る時には、この場面で航空工学用語みたいな「フラップの翼」という言葉は文脈に合わないので、さんざん考えた挙句、「羽根の羽ばたき」という言葉に落ちつけました。

カザンザキス出版 2012 年版の『蛇と百合』を一通り読解し終え、私が信じる翻訳に必要な次の作業、話の概略を把握して物語の構造を分析することに取り掛かり始めたのが、2015 年の 2 月ごろからです。ここで私は物語の構造を、(1) 主人公の心、(2) 主人公の現実世界での言動、(3) 恋人の言動、(4) 世間環境、の四層に分けてそれぞれのレベルで何が描かれているか、何が起きているかを書きだすことによってそのメカニズムを理解しようと試みました。

この試みは、物語を立体的に把握するためにはそれなりに面白かったのですが、頻出する比喻表現やそれらのレベルを何層にもわたってまたぐ記述などによって、なかなかうまく明瞭な理解に至らないもどかしさも抱え続けました。

概略化と分析のころみを 2016 年 1 月まで続けました。そして、いよいよ訳文を実際にするに取り掛かりました。2016 年の夏は、訳文を作るためにパソコンに向かいきりでした。このころついに腰痛に罹ってしまいました。

この訳文において太字で強調した語は、原文において大文字で強調された語の中でも主人公が恋人に対して呼びかけた二人称単数代名詞とその言い換え、訳者が重要だと思った固有名詞の内のいくつかです。特に前者は、主人公が恋人に呼びかけるのに、かなり特殊で濃厚なニュアンスを込めているらしいということが感じられるので、思い切って、「お前」というちょっと怖い雰囲気を持った字面を選びました。

文体の問題についていえば、この作家の他の作品と同じく、異様なまでの緊迫感と熱気を帯びているのは言うまでもないことですが、この作品はある部分冗長で修辞過剰気味だとも感じました。センテンスが長く修飾語が延々と続く文が多いのに気付かれた読者の方もいらっしゃるかと思います。それらの文は日本語として朗読すると息切れしそうです。この作品のギリシア語では、まず文頭で一番重要な主語述語を明瞭に言い切ってしまう、そのあとで思いの丈を修飾語で縷々綴ってゆくのです。原文のリズム感を生かす意図で、できるだけ区切らないで訳しました。

原文が炎のようにめらめらと動いているように見え、訳文として定着させるのは不可能かと思える箇所もありました。そんな場面では炎の穂先よりも根元を見て、そもそも何を何のために表現しようとしたのかを考えるように努めました。

この小説の文章に「練れてなさ」があるとしたら、それはこの小説に、文学の専門家ではない若い画家によって書かれた秘密の日記という設定があることにも留意すべきだと思います。また記述に矛盾があり、所謂「信用できない語り手」の物語だとも解釈できます。

いずれにせよ、この日本語訳文に読みにくさ、見落とし、思い違いがあるとすれば、それは訳者の意地っ張りな独りよがりな性格、学殖の狭さに起因し、ひとえに訳者の責任であることを明言しておきます。



④ 翻訳のための三冊の参考文献

この小説の内容をより深く理解し、訳文を作るうえで参考にした文献はいくつもありますが、主に三つの文献から大きな影響を受けました。その三冊とは新改訳旧約聖書（日本聖書刊行会、1974年）とガブリエレ・ダヌンツィオの小説『死の勝利』（野上素一訳、岩波文庫、1961年）、ジョルジュ・バタイユの評論『エロティシズム』（酒井健訳、筑摩書房、2004年）です。

旧約聖書からの引用は二か所。一つは第一部5月15日の条の末段に、雅歌第4章からの抜粋で、愛の肉体的享受を示唆しています。もう一つは第四部12月22日、徹夜明けの条で絶望を深めてゆく心をエレミヤ書第31章第15節で示唆しています。

ダヌンツィオの『死の勝利』は『蛇と百合』の直接の種本としてカザンザキスが使ったといわれ、恋の絶頂から次第に恋人と心が通わなくなってゆく裕福な知識青年が死に憧れ、最後に無理心中するというプロットがよく似ています。

『死の勝利』の主人公の青年貴族ジョルジョは、そもそも「群集の姿を眺めると思わず胆汁がこみあげてくる」（前掲書上巻227頁）貴族主義者であり、また「彼の全体的存在を充足するような恋愛を渴望」（同226頁）します。しかし、恋が成就し逢瀬を重ねるうちに、「愛する者に対して喜びの迅速な伝達をしないような愛撫の空しさと、鋭い感動の直接的な伝達を持続させないような愛の空しさを」（同244頁）感じるようになり、「自分の陶酔に対して同じような強い陶酔をもって答えてくれない場合は真の陶酔は起こらないことを覚」（同頁）ります。やがて体力と生命力における恋人の優位が明らかになるにつれて彼の気持ちは「悔し」（下巻141頁）さから「強い恨み」（同頁）、「憎悪」（同頁）へと進み、厭世癖も相まって自分と恋人の死を望むようになり。これは、『蛇と百合』の主人公の心理の説明としてもある程度当てはまると思えました。

しかし、設定の違いもあります。『蛇と百合』の主人公は『死の勝利』の主人公よりは体力に自信がありげですし、恋人の性格も微妙に異なっていて、『死の勝利』の女主人公イッポリタが豊満で官能的なタイプなのに対して、『蛇と百合』の女主人公はほっそりとして清楚な女性として描かれています。またイッポリタが子宮の病気由来の不妊の身であり、これが一つの理由でジョルジョは彼女との結婚に踏み切れず憎悪を募らせてゆくのにに対して、『蛇と百合』の恋人はそうとは書かれていません。『蛇と百合』のカップルがなぜ結婚しようとせず、死へと突き進んでゆくのが今ひとつわからなかったのですが、そのあたりの恋愛心理をバタイユの『エロティシズム』だとうまく説明できそうでした。

恋の「情念はまず初めに混乱と変調をもたらし」（前掲書32頁）、「この世でただ愛する相手だけが、私たちの限界が禁止しているものを、二つの存在の完全なる融合を、二つの不連続な存在の連続性を、実現できるように思」（同33頁）わせその「至福の約束」（同32頁）が実現できないと、つまり「肉体の結合の可能性に心情の結合の可能性を付け加え」（同33頁）られないと、「死を、殺人への、あるいは自殺への欲望を、惹き起こす」（同34頁）といった記述に膝を打ちました。

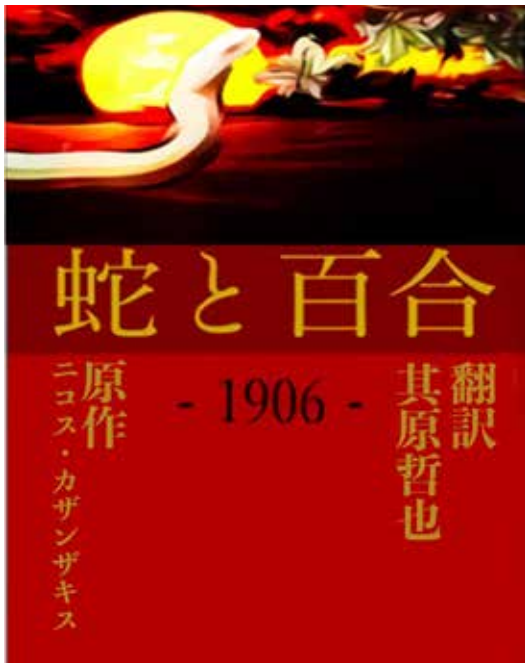
バタイユの『エロティシズム』は、カザンザキスも影響を受けたニーチェが言ったという「神

の死んだ」時代における聖なるものの探求をエロスという面から追求するその問題意識においても、『蛇と百合』と近いものを感じます。聖なるものとは、「厳粛な儀式の場で不連続な存在の死に注意を向ける者たちに顕現する存在の連続性のこと」（同 36 頁）と定義されます。『蛇と百合』の中で、主人公は自分の恋を何度も宗教、宗教的儀式になぞらえます。『エロティシズム』の中でも性愛行為と供犠の類似性が考察される節があり（同 148 頁 -154 頁）、とりわけ「肉」の概念をめぐる論述は訳語を作るうえでも直接影響を受けました。

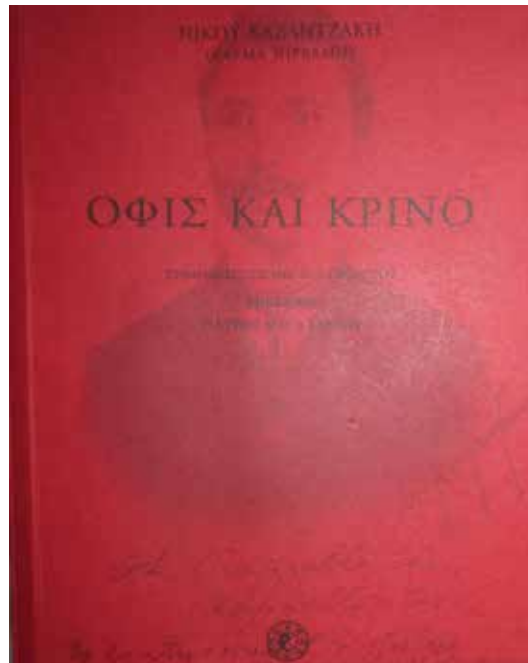
⑤ 私にとってこの翻訳作業は何だったか

『その男ゾルバ』の中でカザンザキスは、自分は今まで「愛」とか「希望」とか「国」とか「神」とか「永遠」といった言葉の中に落ち込みそうになってきたが、それら一つ一つを克服して自分を救出してきたと言っています。だとするとこの『蛇と百合』という小説は、カザンザキスが「愛」という観念を克服し、自分を救出する努力の跡だったのではないかとも思えます。訳した私自身にとってはこの翻訳作業がどのようなものだったかというと、私の精神はこの作業を終えてある意味かえって不安定化してしまいました。そこから私の心にとって、薄暗がりの中舗装されていない道を歩くような状態が一年ほど続きました。

振り返ってみてこの二十年間、自分とカザンザキス先生を信じてひたすら地味な努力を積み重ねた日々でした。師や友人や家族に恵まれ何とかここまで頑張ってきた。あらためて彼ら一人一人にお礼が言いたいです。



『蛇と百合』表紙（京緑社、2018年）



ギリシア語版『蛇と百合』表紙

Ⅲ. 翻訳出版とわが生の手ごたえ

① 出版へ向かう

昨年 11 月のカザンザキス・フォーラムへの参加準備のために、東方キリスト教圏研究会の事務

局とメールをやり取りするようになり、その中でわが翻訳を冊子にして参加者の方々に自由に手に取って読んでいただけるようにする話が浮かび、当日それは実現しました。

今年に入り、事務局から出版の話が提案され、私がそれを受けて出版準備作業が始まりました。その過程で私は自分の脳の構造のようなものが変わってゆくのを感じ始めました。そして今出版されたのち、私はある意味自分の心と外の世界との敷居がなくなったかのように感じています。自分を表現することが、すなわち生きることそのものになったのだと信じています。

## ② なぜカザンザキスに取り組み続けるのか

中学三年生のころはじめて『その男ゾルバ』を読んだとき、マダム・オルタンスやスールメリーナ未亡人の運命に強烈な悲しみ、その理不尽さにいきどおりを感じました。

その歳でカザンザキスを読むとは、いかにもませたことだったかもしれません。でも私はあの時『その男ゾルバ』を読んでおいて本当に良かったとずっと思っています。

私はあの時、確かに彼女たちに共感し、やりきれない悲しみを抱いたのでした。そしてそのように感じることでできる自分が少し好きになったのです。

イラクリオ行きのフェリーの中での不思議な感覚。

カザンザキスのお墓に行ってそのさまを見、銘文を読んだ時の感動。

それらの気持ちが何だったのか、何ゆえだったのか。今でもまだうまく言葉にすることはできません。その答えを探すためにも、私は今日もカザンザキスを読み続け、その想いを日本語を解する皆さんと少しでも共有したいと願って、これからもカザンザキス文学を日本語に翻訳し続けようと思っています。

## 参考文献

- Καζαντζάκης, Ν. (2013) *Ο Καπετάν Μιχάλης τόμος Α'*, Αθήνα: Εκδόσεις Έθνος Α.Ε.
- Καζαντζάκης, Ν. (2005) *Οδύσεια*, Αθήνα: Εκδόσεις Καζαντζάκη (Πατροκλός Στάυρου).
- Καζαντζάκης, Ν. (2005) *Τόντα-Ραμπά*, Αθήνα: Εκδόσεις Καζαντζάκη (Πατροκλός Στάυρου).
- Καζαντζάκης, Ν. (2012) *Όφεις και Κρίνο*, Αθήνα: Εκδόσεις Καζαντζάκη.
- Καζαντζάκης, Ν. (2013) *Ο Καπετάν Μιχάλης τόμος Β'*, Αθήνα: Εκδόσεις Έθνος Α.Ε.
- Καζαντζάκης, Ν. (2009) *Αναφορά Στον Γκρέκο*, Αθήνα: Εκδόσεις Καζαντζάκη (Πατροκλός Στάυρου).
- Μπαμπινιώτης, Γ. Δ. (2008) *Λεξικό της Νέας Ελληνικής Γλώσσας*, Αθήνα: Κέντρο Λεξικολογίας Ε.Π.Ε.
- Brunson, P. (2003) *Collins Greek-English Dictionary*, Glasgow: Harper Collins Publishers.
- ニコス・カザンザキス (1967) 『その男ゾルバ』 秋山健訳, 恒文社
- ニコス・カザンザキス (2018) 『蛇と百合』 其原哲也訳, 京緑社
- ガブリエレ・ダヌンツィオ (1961) 『死の勝利』 野上素一訳, 岩波文庫
- ジョルジュ・バタイユ (2004) 『エロティシズム』 酒井健訳, 筑摩書房
- 日本聖書協会 (1974) 『新改訳旧約聖書』 日本聖書刊行会

古川晴風編著 (1989) 『ギリシャ語辞典』 大学書林

川原拓雄 (2004) 『現代ギリシア語辞典第三版』 リーベル出版

ギャラリー



イラクリオ市街



ヴェニゼロス像



海から見たイラクリオ市街



イラクリオで見た女性像

(そのはら てつや 翻訳家)